

氏名	溝口 茜
ヨミガナ	ミゾグチ アカネ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博第 20 号
学位授与年月日	2024 年 3 月 16 日
学位論文題目	ジュール・マスネのオペラ《タイス》における「ポエジー・メリック」の実践 ータイスとアタナエルの歌唱部分に着目してー
博士論文審査委員会	（主査） 教 授 服部 洋一 （声楽） （副査） 教 授 菅 有実子 （声楽） （副査） 教 授 藤田 茂 （音楽学） （副査） 准教授 荒尾 岳児 （ソルフェージュ） （副査） 安川 智子 （音楽学） （北里大学准教授）
博士演奏等審査委員会	（主査） 教 授 服部 洋一 （声楽） （副査） 教 授 菅 有実子 （声楽） （副査） 教 授 横山 恵子 （声楽） （副査） 准教授 御邊 典一 （ピアノ） （副査） 教 授 星 秀樹 （コントラバス） （副査） 准教授 原田 敬子 （作曲） （副査） 教 授 藤田 茂 （音楽学） （副査） 太田 朋子 （声楽） （桐朋学園大学大学院講師/ フェリス女学院大学講師）

審査結果の要旨

1. 博士論文審査委員会

日	時	2024 年 2 月 13 日（火）10 時 00 分～12 時 30 分
場	所	東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパス C 305
判	定	合
審査結果の要旨		<p>溝口茜の博士論文は、ジュール・マスネのオペラ《タイス》を題材に、「ポエジー・メリック」の手法がいかに関実践されているかを、このオペラの主人公であるタイスとアタナエルの歌唱部分に着目して、解き明かすものである。</p> <p>従来の 19 世紀フランス・オペラ研究は、原作と台本の比較をはじめとする、いわば文学研究が大勢を占めていたが、本研究は、徹底的にテキストに着目しつつも、そうした「言葉の意味」の次元を括弧に入れ、「言葉の音」の次元を問題にするものである。そのオリジナルな着眼点は、溝口の専門とする歌唱実践と直接につながるものであるだけに、博士音楽の学位にふさわしく、かつ、マスネ研究をはじめとする 19 世紀フランス・オペラ研究の一石を投じる価値をもつものである。</p> <p>歌われることを前提につくられる、韻文と散文の中間形態である「ポエジー・メリック」は、それ自体が浮動的な概念であるがゆえに、溝口の論文記述においても、その定義やその効果の説明に、若干の曖昧さ、また、一読しただけでは誤解を生じかねない表現が残ったことは否めない。また、テキストを音節（あるいは音素）に分解するに際し、（その説明はあるものの）独特の表記法をとったために、読解の困難を助長するところがあることも指摘された。</p> <p>それでも、台本作者であるガレの文章を読み解きながら、「ポエジー・メリック」に定義を与え（第 1 章）、それがガレの台本上でいかに実践され（第 2 章）、マスネの音楽化によって、どのような効果をあげうるものになったか（第 3 章）という論述のプロセスは、よく理解できるものであった。</p> <p>第 3 章（つまり、「ポエジー・メリック」の音楽化に関する議論）において、溝口がもっぱら休符とブレス記号に着目したことの正当性については、評価の分かれるところではある。マスネの楽譜には、テヌートやアクセント、また、旋律の方向性など、「ポエジー・メリック」の音楽化において、重要な役割を果たすと思われる要素が、他にもあるからである。しかし、まさしくパイオニア的研究である本研究が、まずは、原作から台本、台本から楽譜へと移されていく、テキストの様態のみに焦点を絞る必要性があったことは、納得できた。</p> <p>審査会における溝口のプレゼンテーションと審査員の質問（あるいは疑義）に対する溝口の応答は、大きな説得力をもつものであり、本論文のディフェンスとして堂々たるものであった。これは、溝口が、この研究を今後、学会等で発表し、さらに深めていく可能性を感じさせるものであり、自立的な研究者としての資格をもつことを、審査員に印象づけるものであった。</p> <p>これらを総合し、審査委員会は、合の判定を下した。</p>

2. 博士演奏等審査委員会

日 時	2021 年 10 月 12 日（火）17 時 00 分～18 時 00 分
場 所	東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパス TCM ホール
判 定	<p>留学前に比べ帰国してからは、テキストの音楽的表現に重要とされる中音域の充実と表現力の向上が顕著に見られ、確実な成長を見せている。一方、曲中及び曲ごとのテキストに沿った音色の選び方や、それらに即応できる呼吸と発声の技法、高音のテクニック、フランス語のディクションには、まだまだ鍛錬を要する部分があると感じられるが、演奏としての「魅せ方」には良いセンスを持ち合わせており、博士としての演奏といえる十分な側面を感じさせるものであったので「合」とした。</p>
審査結果の要旨	<p>「判定の理由」で述べた。様々な課題に関する指摘は次のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プログラム・パンフレットの記述に関しては単なる「情報」に留まることなく、本人の研究・分析の結果、本人の観点をもっと載せるべきであり、きちんと頁数を付すなど、研究者としての品格を更に表すような記述に努めるべきである。演奏曲の選定とその演奏順に関してもプログラム中にその理由と意義を記載すべきであり、通常のリサイタルと異なり、博士最終審査としての演奏会という一線を画したものである。 ・研究の参考とする文献には他にフランス語による専門書等も記載されるべきと思われる。フランス語をテキストとするフランスの作曲家の作品を研究するからには、その言語に関するスキルの程度もそこに現れるであろう。 ・曲の内容に沿った表現を更に要求したくなると思わせるのも、こういった本人のフランス語能力が問われるところである。厳しく言えば、一つ一つの言葉、発音そのものが「身体化」されるまでに至っていないのではないだろうか。その点がさらに磨きがかかれば、聞き手をより一層音楽の中へと引き込んでいく魅力を持てるようになるであろう。またフランス詩の構造的・韻律論的部分をしっかりと理解しおさえた上で、プログラム上への転記の仕方などもこれに則り、さらに正確を期す記述となるべきである。 ・オペラ作品において、「魅せる演奏」を心がけていることは必要なことだが、それならば更に、所作・身体表現の点でオペラ演出家にアドバイスを求めるなどのことも積極的にしていくべきであろう。そうでないと、本人の単なる思い付き、根拠のない動きに終わってしまう危険性があり、その点でも専門家の指導を仰ぐことが必須である。 ・演奏能力をトリプル・プロフェッサーの下で鍛錬すること自体、時間的にも体力的にも大変苦勞も多いことと思われるが、同時に研究者でもあるということ肝に据え、演奏と研究を、どうバランスをとり、研究もまた十分に進めていけるかという計画性を持ってほしいと感じる。 <p>しかしながら、プログラミングした曲を、全般的に美しくまとめており、声に感銘を与えるような力強さも兼ね備え、一つ一つの作品の内容を理解して、表現しようという意欲の見える演奏であったことは評価できるものである。舞台上に華がある点、安定感を感じさせる点、演奏会形式の振り付け所作にも大変気を配っている点は、評価されるものがあり、また全体として博士の演奏にふさわしいもの（厳しく言えば、学生とプロの狭間にあると感じさせるものといえようが）であったと感じさせ、上記の課題も、今後の実技指導を通して本人の努力次第では克服できると感じさせ、最終審査演奏そのものは、十分に博士の水準に達しているものと評価から「合」とする判定に至ったものである。</p>

以上